

我が父ハリール・ブヌ・シャーヒーン ——‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī の記述の比較研究——

菊池忠純

I はじめに

15世紀マムルーク朝をめぐる国際環境は大きな変化にさらされていた。地中海をめぐる地域ではキプロス遠征に見られる十字軍勢力との関係、オスマン朝の勢力拡大、イベリア半島におけるキリスト教徒勢力の拡大、北アフリカ・マグリブ地域におけるイスラム諸王朝の再編成、一方インド洋地域におけるポルトガル勢力の進出による急激な変化、中央アジア、イランのティムール朝との関係またイラク地域におけるトゥルクメン族との関係などである。

そのような状況のもとマムルーク朝時代の年代記は当時の様子を活写している。しかし現在までのところ15世紀の半ばから16世紀はじめまでの部分はそれ以前の時代に比べると比較的手薄な印象を受ける。¹⁾

本稿は、はやく19世紀初めに Volney, C. F. にその重要性が注目され1894年にパリで校訂本が出版された *Kitāb Zubdat Kashf al-Mamālik* の著者ハリール・ブヌ・シャーヒーンの生涯(813/1410-873/1468年)²⁾を彼の息子‘Abd al-Bāsiṭ(844/1440-920/1514年)の記述から検討するものである。また同時に‘Abd al-Bāsiṭの歴史書の特徴を同時代の歴史書と比較する事で検討する目的もある。

ハリール・ブヌ・シャーヒーンについては早くから注目されていたにも拘わらず意外に研究が少なく、また彼の著作は、最初に注目されてから1世紀以上が経っているので、現在の研究状況の中で再検討そして再評価すべきであろう。

II

IIIで訳出して検討する史料は‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī³⁾の歴史書 *ar-Rawḍ al-Bāsim fī Ḥawādīth al-‘Umr wa-t-Tarājim* (Vatican Library, Vaticano Arabo, 728, 729)の873年の年代記部分(*mutajaddidāt*)に続く、名前のアルファベット順に並べられた同年に没した人物の伝記部分(*tarājim al-a’yān wa wafayāthum*)のハリール・ブヌ・シャーヒーンの項目[Vaticano Arabo, 729 (vol. II); fols. 229b-234b] (図1は始まりの部分 fol. 229b)である。ハリールの記

事は同書の年代記部分をはじめ同じ著者の別の著作にも散見するが本稿では関連する記事に少々触れるのみにする。

ar-Rawḍは890年代に執筆を終えた、著者の誕生年である844/1440年から874/1469年までの30年間の年代記であるが、そのうち14年分全とその他5年分については部分的に欠落している。従って本文で「前述のように」と指示されていても現在の残っている部分に該当箇所がない場合が多い。そのなかで著者が同時代史を書く一つの原因であったと思われる父の生涯を顕彰した伝記部分が完全な形で残っており、彼をめぐる社会的環境を知るためにも有益な情報を提供している。

これまで刊行された史料でハリール・ブヌ・シャーヒーンについて伝記情報を伝えているのは多数に上るが、まとまっているものとしては Ibn Taghrī Birdī [al-Manhal, V, 258-61; ad-Dalīl, I, 291] と as-Sakhāwī [aḍ-Ḍaw', III, 195-7; Wajiz, II, 808] また Ibn Iyās [Bada'i' III, 25] があり、それぞれの年代記部分にも同じく散見される。

Ibn Taghrī Birdī は、著者とは年長の同時代人である。著者は al-Manhal, V, 258-61に当たる部分を読んでいる⁴⁾。as-Sakhāwī は著者にとって歴史を書くにあたっての先生である。また Ibn Iyās にとっては as-Suyūṭī と並んで著者は師にあたる [EP, III, 812-3, art., "IBN IYĀS" by W.M. Brinner]。本稿ではこの三人の叙述と比較して、この著者の父ハリールの伝記を検討する。方法としては便宜的に記述を10の部分に分ける。そしてそれぞれの節の後に関連する記述との比較と特徴を述べることにする。

III

1.

(vol. II, fol. 229b) . . .

Khalīl b. Shāhīn ash-Shayhī aṣ-Ṣafawī aṣ-Zāhirī al-Maqdisī al-Qāhirī al-Ḥanafī al-Amīr al-Wazīr aṣ-Ṣāhib Ghars ad-Dīn Abū aṣ-Ṣafā, 彼は Nā'ib al-Iskandariya として知られている。彼は(私の)父である。神よ慈悲をもって彼をお守りください。そして天国で安楽に暮らせませう。

彼は811年または813年 Sha'bān 月11日あるいは13日金曜日イェルサレムの al-Madrassa al-Khātuniya で生まれた。

当時彼の父(Shāhīn)はその町の ḥājib でまた shādd 'ala-l-qumāmat(聖墳墓教会管轄財務監督)であり後にナーイブとなった。

彼が誕生した頃、母は病気であったので大カーデイの ash-Shaykh Burhān ad-Dīn b. ad-Dayrī の母が乳母となった。従って父はよく自分は ash-Shaykh Burhān ad-Dīn b. ad-Dayrī の乳兄弟であると言った。私は彼女が我々のシャイフである Shaykh al-Islām as-Sa'd b. ad-Dayrī の母かどうかは知らない。

誕生についての不思議なことに次のような話がある。彼が生まれる前には女の子しか生まれなかったため、母は男の子を望んでいた。妊娠したとき、彼女はイェルサレムから預言者イブラーヒーム

(Khalil)の墓があるヘブロン(Hibrūn)の町に出かけ、夜に聖域に入りお腹を床につけて、男の子を授けていただければ、貧者のために多額の喜捨をして、子供に Khalil と名付けることを誓ったところ、果たして神の許しで男の子が産まれ、そこで彼を Khalil と名付けて誓ったものを捧げた。彼女は、50ディーナールで購入した真珠がついた金のイヤリングを彼につけさせ、無事に7歳になればイブラーヒーム(Khalil)のための誓いの箱の中にそれを投げ入れると誓った。

彼はエルサレムで育ち『コーラン』を暗記した。彼は賢明で理解力に優れ機敏でまた優雅な振る舞いを持っていた。彼はエルサレムの知識人の教えを受けた。

ここで挙げられている4日とも金曜日とならない。本人から直接聞いたという Ibn Taghrī Birdī[al-Manhal, V, 258; ad-Dalīl, I, 291]と息子 ‘Abd al-Bāsiṭ が書いた彼の伝記の要約を見たという as-Sakhāwī の記述から813年 Sha‘bān 月が妥当と思われる。また彼の別の年代記である Nayl には生年は記していない[Nayr, Hunt. 610, fols. 206b-207a]。場所については al-Ḥāra al-Khātuniya が正しいと思われる[aḍ-Ḍaw’, III, 195-7]。Ibn Iyās の793年説は史料に錯簡があるとと思われる[Badā’i’, III, 25]。また今までのところ他の史料で, Shāhīn がエルサレムのナীবであったという記述は発見できなかった。

2.

父 Shāhīn は、当時エルサレムで公職についていなかった Amīr Majlis の Shaykh aṣ-Ṣafawī から az-Zāhir Barqūq が購入したマムルークの一人であった。彼は元は Tatarī という名であったが, Sarāy の町で改宗して Shāhīn という名を名乗ったと言われている。というのは az-Zāhir (Barqūq) の王朝(在位784/1382-791/1389, 792/1390-801/1399年)の初めにはタタルは憎まれていたからである。

Shāhīn は az-Zāhir の死後暫くしてから、エルサレムの Ḥājib 職の後 shādd al-qumāmat そして an-Nāṣir Faraj(在位801/1399-808/1405年)の末期にはナীবに昇進した。an-Nāṣir Faraj の死後、生じた反乱の時には政治から身を引きエルサレムに居住した。当時彼は勇気と権力があることで有名な者の一人であったので身を偽っていると言われた。

al-Ashraf Barsbāy がスルターンになると(825/1422年)、彼はカイロに向かったが、これは2度目のことで以前は az-Zāhir Ṭatar 時代(824/1421年)の初めに出向いたことがあった。この度はしばらく滞在した後(8)27年あるいは(8)28年になって al-Ashraf Barsbāy は公職なしで毎月3000ディーナールの給与と肉やかいば等現物を支給した。/[fol. 230a]また馬を与えることも約束した。彼は人々から身を引いて館に待機したが、しばしば al-Atābak Baybughā al-Muẓaffarī を訪ね、彼と共に狩りに出かけた。彼は動物や鳥や狩りの知識が豊かだったので同行を求められたのであった。al-Atābak は、なにがしかを彼の diwān から支給した。このことからある者はこの al-Atābak に仕えたと言っているが、事実以上のものであった。

834年彼はカイロで没した。彼の妻、つまり父(Khalil)の母である as-Sitt ‘Ā’isha——彼女の伝記は(この本の)(8)57年の部分で述べたが——の父 Asandamur ash-Shayhī のカラーファの turba(廟)に埋葬された。

父(Khalil)は彼(Shāhīn)の死後 ad-Dawādār al-Kabīr の Uzbek al-Ashqar に仕えたが、子供の待遇で

召使い扱いではなかった。というのは彼は同僚(khushudāsh)の子供であったからである。彼は Shādd 'ala-l-Aḥwāsh as-Sultāniya(スルターン所有物件を管轄する監督)とされ、狩りについて意見を求められた。彼は彼を年少であったが賢明であったので、近くに侍らせ重用した。これは Uzbek が無役でイエエルサレムに向かうまで続いた。

al-Amīr Shaykh aṣ-Ṣafawī は, al-Malik az-Zāhir Barqūq のアミールの一人で要職を占めていたが800年からはイエエルサレムに公職につかず滞在した後, 801/1398年 Marqab の牢獄で死亡した人物であることから [al-Manhal, VI, 312-4]⁵⁾, 彼が aṣ-Ṣafawī のマムルークであったのはいつからかは不明であるが800年頃からイエエルサレムに縁ができたことが判る。なおこの人物との関係は Khalīl 自身が話した言葉として Ibn Taghrī Birdī が伝えている。

828年頃[参考 aḍ-Ḍaw', III, 195]一家はカイロに移った。Shāhīn がカイロで狩りの才能を生かして仕えていた人物について、この記述には二人の人物すなわち al-Atābak Baybughā al-Muẓaffarī (d. 833/1340年) と Khalīl が仕えたアミール Uzbek ad-Dawādār がみられる。al-Atābak Baybughā al-Muẓaffarī は827年入牢以後ダミエッタとイエエルサレムで待命状態であったこと、また Ibn Taghrī Birdī 自身が目撃したと伝えていることから親子二代にわたり仕えたのは後者の Uzbek ad-Dawādār であると考えられる [al-Manhal-Wiet, 105; al-Manhal, V, 258]。彼は ad-Dawādār al-Kabīr 職に827から31年まで在職して後、捕らえられて以降無職でイエエルサレムに向かい、そこで838/1430年疫病で死亡した人物である [aḍ-Ḍaw', II, 273]。この記述では、Shāhīn についても Khalīl についても彼のマムルークでなかったことを強調しているが、それは著者 'Abd al-Bāsiṭ が常に批判の対象としていた Ibn Taghrī Birdī の、マムルークであるとの記述を意識しての叙述である。又著者の歴史の師である as-Sakhāwī がはっきりとマムルークと記述していることを意識してであろうか、Uzbek ad-Dawādār と Shāhīn が khushudāsh であったので Khalīl は子供の待遇を受けたというのは苦しい叙述である [aḍ-Ḍaw', III, 195]。

Shāhīn の没年834年は写本では明瞭である。しかし文脈から判断すると828年から831年の間のことでそれも30年か31年であったと思われる [参考 aḍ-Ḍaw', III, 195]。妻の父はその名前からアウラード・アン・ナースであると考えられよう。

3.

父は人々から離れて、宗教的知識の勉強に励んだ。彼は、有名なウラマーに学んだ。・・・(中略)・・・このように、イスラム世界の東西から、インドやペルシアやルームその他の地方のイスラムのウラマー、またエジプトやシリアのシャイフ達であった。何人かの有力者は彼が法意見を述べたり教授することを許可した。

彼は当代のハーフィズであり Shaykh al-Islām の Ibn Ḥajar のところに、ハディースを聞きにたびたび出かけた。又彼の何冊かの著作についても聴講した。彼はイジャーザを受け同席したすべての人々がそれを証言した。・・・(中略)・・・詩や書簡をやりとりし、師は彼を好み彼の歴史書 Inbā' al-

Ghumr⁶⁾の各所で彼に言及した。私は、やり取りした詩や頌詩を後で述べることにしよう。

彼のハナフィイー派法学を中心とした教育についての記事はこの記述が一番多く情報を伝えている。略した部分はカイロで10人、ダマスカスで11人の教えを受けた教師の名前が上げられている。それぞれについて彼との接点の検討は別稿に譲るが、何人かの名前を上げると乳兄弟の場所で触れられた as-Sa'd b. ad-Dayrī, 著者の先生でもある al-Kafjī, 歴史で有名な al-Badr al-'Aynī や al-'Alam al-Bulqīnī が見える。Ibn Ḥajar との関係は有名であり, as-Sakhāwī の手元には「彼が Ibn Ḥajar やその他の人々とやり取りした書簡」があると述べている。また「彼の息子 ('Abd al-Bāsīt) は私に自筆で彼 (Khalīl) の伝記を書いてくれたが、そこには我々のシャイフ (Ibn Ḥajar) が法意見を提出したり教授する許可を与えたと書かれている」とある部分はこの記述を髣髴とさせる [aḍ-Ḍaw', III, 197; Badā'i', III, 25]。

4.

Uzbek がイェルサレムに追放された後、彼が人々から身を遠ざけていたとき、その名声を聞き al-Ashraf Barsbāy が彼を求め、Ibn aṣ-Ṣughayyar に代わり Nāzīr 'ala-l-Khaṣṣ bi-th-Thughhr as-Sakadārī (アレキサンドリア・スルターンの財務監督) に任命した。彼はうまく職務を執行したので al-Ashraf は気に入る、職務に Nāzīr adh-Dhakhīra ((アレキサンドリアの)スルターンの財庫監督) 職をつけ加え、当地での香料の売却を任せた。次いでその al-Ḥajīb に任命した。さらにそれらの職務に加えて彼を, Jānbak ath-Thūr⁷⁾ に代わりナーイブに抜擢した(837年)。これは稀なことと考えられる。というのはナーイブを監督するアミールのものであったハージブがハージブ職を監督するナーイブになったからである。彼は自分に代わりナーズィル職とハージブ職を担当する者を任命した。彼はこれらの職務を立派に果たし、彼の統治は感謝を持って迎えられアレキサンドリアの人々は彼を好んだ。(fol. 230b) 彼はカイロに参上したところ、al-Ashraf は彼を歓迎して軍人と王朝の有力者の集まりで彼に感謝の意を表した。

そのころ彼は、(この書物で)前にその伝記を記した al-Khwand Julbān の姉妹と結婚した。

彼はアレキサンドリアに戻り、職務に献身すると同時に当代のアレキサンドリアの知識人と集まりを持ち、またハディースを聴いた。

831年 Uzbek が捕らえられた [aḍ-Ḍaw', II, 273] 後 al-Ashraf に仕えることになる経緯については記述は簡単でまた彼の社会的背景を考えるのに重要な部分を書いていない。すなわち Ibn Taghrī Birdī と as-Sakhāwī は共に「彼は妹の夫 (ṣihr) の al-Khawājā Ibrāhīm b. Qarmish の仲介でスルターン al-Ashraf Barsbāy のマムルークとなった」と述べている [al-Manhal, V, 258-9; aḍ-Ḍaw', III, 195]。al-Khawājā Ibrāhīm b. Qarmish (d. 856/1452年) は、父の代からの奴隷商人でこの時代に活躍した人物である [aḍ-Ḍaw', I, 118]。彼の妹、すなわち著者のおばが奴隷商人と結婚しておりその夫の影響でスルターンのマムルークになり官職を歴任する始まりについて著者は明確に述べていない。アレキサンドリアで王朝として重要な香料貿易に従

事していたことは彼の有能さを示すのであろう。

5.

その後彼は何度も職務からの辞退とカイロに参上する許しを求めたが遂に承認された。彼は参上したとき既に Amīr Ṭablkḥānāt の地位に加えて al-Bashlqūn (? 不明) を持っていた。彼はアレキサンドリアから参上したとき Ṭablkḥānāt と同様の地位で参上したと言う者がいるが、彼は間違っているし嘘をついている事になる。というのはその地位は既に Ṭablkḥānāt 以上の地位であったからである。彼は既に Muqaddam al-Ulūf と共にスルターンとの集まりに参加していた。次いで鑄造所のナズィル (Nāzir Dār aḍ-Ḍarb) の職務が加わり (839年)、次いで al-Ḥājj bi-l-Mahmil (巡礼団) のアミールに任命された。彼は (8) 39年巡礼団を率いて巡礼した。以前父 (Shāhīn) と巡礼をしたことがあったので今回は彼にとって二回目であった。

彼は巡礼から戻り復職した。また彼は Shaykh al-Islām Ibn Hajar のハディース講義の集まりにしばしば参加して彼や彼以外のウラマーから大いに学んだ。彼の館でウラマーに囲まれた集まりがよくあった。

次いで al-Ashraf は彼にワズィール職に就くように求め、彼は固辞したが強く求められ義務として強いられた。(8) 40年に彼は、その地位についた。短期間その職にあったが彼はその職に相應しくない物事が判り辞職を求め認められた。

彼には Ṭablkḥānāt の地位が残った。次いでスルターンの信頼を受けて ‘Umar Shāh に代わり al-Karak と ash-Shawbak のナイーブに任命された (841年)。当時カラクのナイーブ職は、重要なナイーブ職の一つであった。そしてその城塞は財産の所蔵庫と穀物の収蔵庫であった。

父は私 (‘Abd al-Bāsiṭ) に次のように言った「al-Ashraf は私をカラクに任命したとき、私の顔にカイロを離れる事に不満げな様子を見て私室で次のように言った「そなたはカラクに何故私が任命したのか存じているか」。父は言った「私は言った「はい、主君たるスルターンは私に御尊顔を拝するという私にとってカラクが1000あっても、より貴重なことから遠ざけるためであります。私には耐えられません」そこで彼は次のように述べた「いや断じてそうではない。私がそなたにそこを任せるのは私の息子のために避難地と財庫にしてもらいたいためなのだ。近く私は死ぬであろう」。彼は弱っていた。彼は自分自身に以前とは違う気分を感じていたようであった。死の病の始まりであったがまだ外には現れていなかった。次いで彼は言った「私が死ぬば、彼らは私の息子に反旗を翻し、彼は避難のための要塞が必要となりそなたのもとに行くであろう。そなたのもとには彼の母も同様な彼のおばがいる」。彼 (父) は言った「そして彼は私に多くの責任を持たせた。このために al-‘Azīz (在位841/1438-842/1438年) がスルターンの役割を失い、彼のことについて様々なことが言われ、それは言われた通りのことであったが、そのとき、彼はカラクの彼の母方のおばの夫のところに向かったのである」。これこそ (次に即位したスルターン) az-Zāhir (Jaḡmaq) (在位842/1438-857/1453年) が父をカラクから免職させた理由であった。

アレキサンドリアから戻ってきたとき位階が Ṭablkḥānāt であったかそれ以上であったかについてやや激した口調の叙述は再び Ibn Taghrī Birdī と as-Sakhāwī に向けられたもので

ある[al-Manhal, V, 259; aḍ-Ḍaw', III, 195]。ワズィール職の在職期間について840年の短期間とあるが, as-Sakhāwī は短期間とのみあり文脈から840年の巡礼の前とわかるだけである。また Ibn Iyās は839年 Ramaḍān 月から840年 Ṣafar 月まで, Ibn Taghrī Birdī は839年 Ramaḍān 月7日月曜日から Shawwāl 月8日までと確定できない[aḍ-Ḍaw', III, 195; Badā'i', II, 169, 172; al-Manhal, V, 259]。後任者との関連で言えば Ibn Iyās の上げている840年 Ṣafar 月までというのも無視できない。⁸⁾

6.

(さて)父はカラクに向かい約2年間いた。その後その職を解かれ Aqbughā at-Turkmānī と交代した(842年)。彼は公務がない現物支給のアターバク待遇でサファドに派遣された。父はカラクから去るときに、快く穏便に aẓ-Zāhir への賞賛の言葉と共に, Aqbughā に引き渡したという知らせが aẓ-Zāhir に届いた。それは彼が aẓ-Zāhir の王朝と彼の統治を大いに尊重していたためであった。これ(引継の様子)はこれまでにないことであった。

父はサファドのアターバク職を管轄したが、当時そのナードは/(fol. 231a)アミール Īnāl al-'Alā'ī であった。彼はその後スルターンに即位した(この本で)前述した al-Malik al-Ashraf (Īnāl al-'Alā'ī) (在位857/1453-865/1461年)である。彼らはすぐに親密となり, Īnāl は常に彼の館に騎乗してやって来たものであった。両者の間には確固とした友情と以前にも増した好意があった。しかし彼がスルターンになった後、この結果は現れなかった。それは我々はこの al-Malik al-Ashraf Īnāl のスルターン時代の初めに父がカイロに参上したことを述べるところで明らかにしよう。

父はサファドに短期間いたが、そこでダマスカスとアレppoの二人のナード Īnāl al-Jakamī と Taghrī Birmish の反乱が起こり軍が派遣された。父はサファド軍とともに出発した。それに対して Īnāl は、「あなたは奉仕や遠征の義務はない」と彼に言ったが、父はサファドに留まることに同意しなかった。かねてから彼には優秀な軍とよく仕えるマムルークがいた。そこで彼は次のように言った「私はスルターンの重要事から背を向けることはない」。そして彼は出発した。

Īnāl によって最初はスルターン軍⁹⁾が敗北したが次に逆に Īnāl al-Jakamī を破ったということがあったときのことである。(最初の敗北で)彼らの軍旗が倒れてしまい、その日父のマムルークの一人 Asandamur の手にあった父の軍旗以外に残っていなかった。彼はその場所を離れなかった。軍は退却していたが(それを見て)この軍旗の下に集結し進撃して Īnāl al-Jakamī を攻撃して破った。Īnāl の状態は彼らに栄誉を与えた。父はこの混乱の中で地上にある Īnāl al-Jakamī の戦斧(ṭabar)を見つけ、拾い上げそこに17の刀傷を見つけた。父はそれを、aẓ-Zāhir がアターバク職からダマスカスのナードに任命して Īnāl との戦いに派遣していた Aqbughā al-Timurāzī のもに持って行った。そして彼にそれが Īnāl の戦斧であり、彼が死んではいないか死にかけていないのであれば、彼の戦斧が手から落ちることはないと知らせた。名士の一団が到着したが彼らはそれが Īnāl の戦斧であることを知っていた。そこで Aqbughā は aẓ-Zāhir に書簡を送り、状況と Īnāl の敗北又父の軍旗のことで Īnāl の戦斧の発見を知らせた。これら全ては Īnāl の件が解決して彼を捕らえる前であった。彼が捕らえられると、伝令がこのような場合の常として次々と送られ先の伝令が次の伝令と鉢合わせをするぐらいであった。

az-Zāhir は状況を知り衆人の前で彼に感謝した。そして Īnāl が捕らえられたというニュースが到着すると az-Zāhir の喜びは増し、Taghrī Birmish の兄弟 Ḥasan Qajā に代えて父を Malaṭīya のナীবに任命した。そして彼に任命書と榮譽の品々が送られ、また多額の金額をあたえるように命令した。また彼はそれ以上の地位が空いていれば彼を任命するところだが今の所はその地位にしか任命できないと説明した。

カラクのナীব職そして王朝の交代と共にサファドのアターバク職そして後にスルターンとなったイーナールとの交友それに842年に起きた Īnāl al-Jakamī と Taghrī Birmish の反乱での手柄とマラティーヤのナীব職就任の経緯が語られている。Ibn Taghrī Birdī の記述はこの部分脱落がある。「841年 Rabī' I 月 5 日土曜日にカラクのナীবに任命されしばらくその職にあり、免職され同年末 Malaṭīya のナীবに移されたがそれはそのナীবの Ḥasan Shāh が兄弟のアレッポのナীব Taghrī Birmish と反乱を起こした後のことであった」とあるが[al-Manhal, V, 260], これは校訂者が注で aḍ-Daw', III, 195を引用して述べているように、間にサファドのアターバク職に任命された部分を補うべきである。¹⁰⁾

7.

彼は Taghrī Birmish と al-Jakamī の件が終結した後に Malaṭīya に向かい、しばらく職務に就いた(842年)が、そこで私('Abd al-Basit)が生まれたのである(844年)。

この職務に在任中に彼は az-Zāhir への莫大な贈り物を持ってカイロに参上したところ、彼は到着に際して宴を開き厚くもてなした。彼は Malaṭīya から辞任を求めたが受け入れられず、丁寧に断られ彼は戻された。

彼は Malaṭīya 在任中に学問に励み何冊かの書物を書いた。彼が主催する集まりには当地の有徳のウラマーが出席した。

しばらくそこに留まり再びカイロに参上する許しを求め、前回に勝る見事な様子で入城した。

彼とそのナীবの Qanībāy al-Ḥamzāwī との間には反目があった。これについては(この本で)前述したが、彼(ナীব)は az-Zāhir へ告発状を送り、スルターンの評判を傷つける噂の元凶として彼を名指しした。そこで az-Zāhir の命令が発せられ、彼を鎖につなぎアレッポの城塞の獄に幽閉した。/(fol. 231b)彼は短期間そこに繋がれたが名士の一団が仲介した。その中には al-Ḥāfiẓ Ibn Ḥajar がいた。az-Zāhir にアレッポのナীবの目論見が明らかとなった。そこで彼は彼を釈放して現物支給と共に Madīnat Qāqūn(を与えた)が、彼はイェルサレムに滞在した。そして父はヘブロン(Madīnat Khalīl)に居住する許しを求めそれは許可された。az-Zāhir は Qāqūn に加えて幾つかの地区また手当を与えるように手配した。

彼は az-Zāhir に、巡礼の許しを求めたがそれが許可されるとともに多額の金額が送られてきた。そこで彼はヘブロンからマムルークの一部と共に巡礼した。これは彼の3回目(の巡礼)であった。

スルターンは彼をカイロに招いた。彼がスルターンの前に参上すると、スルターンは敬意を表して立ち上がり彼を座らせ、イェルサレムのナীবに任命した。これは(8)50年の Muḥarram 月のことで

あった。又彼にダマスカスの *taqdimat alf* の地位がつけ加えられた。彼には多くの品物と1000ディーナールが与えられた。彼は、そのナীব職に就任するために出発し、彼は1年弱それを管轄した。その後辞職を申し出て認められた。

彼は *taqdimat* の身分でダマスカスに向かうように命令され、書面で彼はダマスカスの左翼軍のアミールになるように指示された。彼はそこにしばらく滞在したが彼の館の門の前では複数の *al-faqāra* (太鼓の一種) が叩かれた。これはダマスカスにおける彼についての稀なことの一つである。ダマスカスのナীবやアターバクや大ハージブ以外に、このような(ことを行う)新しい習わしはなかった。その他の千人長 (*muqaddam al-ulūf*) とはいえ全部二つの大太鼓 (*ṭabl*) と二本の笛 (*zamr*) が叩かれたり吹かれたりした。

Jahān Shāh の攻撃からアレppoを防衛するために軍が出発したとき、父は誇り高く強い意志を持ち出発した。

脅威が取り除かれたとき彼はカイロに参上した。*aẓ-Zāhir* は彼を寛大にもてなし *al-kabsh* 地区の *Tamurbāy* の館に滞在させた。彼(スルターン)は彼と私室で親交を結び、彼に信仰や俗世の諸問題や王国の統治状況 (*Aḥwāl Qawā'id al-Mamlaka*) について沢山質問したものであった。そして彼にダマスカスで保持していた地位に加えて20人長の地位と以前にカイロに滞在していたときに彼の名で支給されていたもの、またイェルサレムの *adh-Dhakhīra* (スルターンの財庫) から彼の子供達に支給されていたもの以外に1000ディーナールを与えた。

彼はダマスカスに戻りしばらくして *aẓ-Zāhir* に(個人的な)巡礼の許可を求めた。それは許可されなかったが、スルターンは次のように述べた「彼が一人で向かうのは相応しくない。もし彼が集団を率いて向かうのは多額の支出が必要である」。(はたして)次の年度に彼はシリア巡礼団のアミール職に任命され、見事な礼服と金の鞍と金糸の刺繍がある鞍覆いを特に置いた乗り物が送られた。又準備のためにダマスカス要塞から5000ディーナールを与えるよう指示があり、彼はそれを受け取った。彼はそれに同額かそれ以上の金額を自分の金でつけ加えた。彼は見事な様子で巡礼に出発したが、私 ('*Abd al-Bāsiṭ*) はこの年に彼に同行したのであった。すばらしい巡礼であった。

Malatīya のナীব時代は辞任を何度も求めているが彼にとって実りある4年間であったことは、ここにも述べられているが、vol. I, fol. 64a には846年の年代記部分に彼の主著である *Kitāb Zubdat Kashf al-Mamālik wa Bayān aṭ-Ṭuruq wa-l-Masālik* の完成の様子が述べられている。「*al-Muḥarram* 月4日火曜日 *Malatīya* で、父は名著 *Kashf* の要約である *Zubdat Kashf al-Mamālik* という題名の書物の執筆を終えた。*Malatīya* のカーディーであり徳のある知識人で書に堪能なカーディー *Muḥammad al-Ḥanafī* が書写して、*aẓ-Zāhir* に献上した」。2度目のカイロ参上の際に辞任の意向が受け入れられた理由の一つであったかもしれない。

「そのナীবの *Qānibāy al-Ḥamzāwī* との間には」とある部分にはその前に脱落部分があると思われる。カイロの記事に続いてではあるが、847年 *Jumādā II* 月20日月曜日アレppoの *Atābak* 職就任とそこのナীবで843年から在任していた *Qānibāy al-Ḥamzāwī* (d. 862/1457) との確執について述べている部分である。[*al-Manhal-Wiet*, 268-9]. vol., I, fol.

22b の848年の年代記部分によるとアレppoの Atābak 職免職は Jumādā II 月2日月曜日であった。

854年にカイロに來た彼は Ibn Taghrī Birdī の館を訪問してしばらく会見した。「私は彼の詩と歴史の草稿を見た。彼は私に幾つかの分野の著作があることを述べその題名を挙げ、自作の詩を詠んだ。特にアレppoの Atābak 職を免ぜられた際の状況を明らかにしようとスルターンに与えた詩を聞かせてくれた」。それに続けて6冊の著作を上げている[al-Manhal, V, 260-61]。この中には主著であり8年前には完成していた Zubda や関連する行政の手引き書類は言及されていない(表2参照)。伝記集 al-Manhal における Ibn Taghrī Birdī の彼の伝記はこの年までで終わっている。奇妙なことに、873年の没年までを伝えている as-Sakhāwī は彼の息子(‘Abd al-Bāsīt)が伝記を短く纏めたものを書いてくれたと言っているが、伝記の最後は「Ibn Taghrī Birdī が述べるところによると」として上記の文章を引用しており、著作についても同じ6冊を同じ順序で上げているのみである。[ad-Daw’, III, 197]。

8.

巡礼から戻ると既に az-Zāhir は亡くなって、al-Ashraf Īnāl がスルターンであった(在位 857/1453-865/1461年)。彼は慣例に従って2度目の巡礼のアミールに任命された。(この度は)3つのラクブ即ちシリア、アレppo、カラクの巡礼団がつけ加えられた。彼に2000ディーナールが送られた。彼は(彼自身の)5度目の巡礼を果たした。

何ヶ月か(ダマスカスに)居た後、彼はカイロに向かった。それは、もし神がイーナールに王権を与えたならば彼は許可なく参上するといふかねてから彼とイーナールとの間で約束していたことであった。彼はこれがなされたと考え、(この本で)前述したように参上しようとした。(しかし)al-Ashraf Īnāl は、彼を(既に到着していたシナイ半島北部の)Qatya から(ダマスカスに)戻るようにさせ、彼に書簡で詫言るとともに、謝意を表し様々な品物を遣わした。彼はダマスカスに戻り頻繁に現在就いているダマスカスの taqdima からの辞任を申し出た。(この本で)以前明らかにしたよう、その願いは間もなく叶えられた。

彼(スルターン)は父にタラブルスにおける現物支給と共に公務がない20人長の待遇(imrat ‘ishrīna)を与えた。(この本で)前述したように彼は(8)59年にそこに向かい、しばらく滞在した。彼は奉仕やその他の公務から自由であったので、彼は書物を読みハディースを聞き、学んだことを朗唱することに熱中した。/(fol. 232a)彼はこの休息の時期に何冊もの著作を著した。また彼はそこに館とザーウィヤと本人が埋葬されるための墓を建設した。(墓は)建設には何年も掛かった。彼はタラブルスから出て何年もその地を離れていて、ようやく戻った後突然亡くなったが埋葬されたのはそこであった。あなたはその事情については追って知ることにしましょう。

タラブルスでは彼にとって休息と安寧の時期であった、その地の名士は全て彼を褒め称え彼を頻繁に訪問した。彼は al-Ashraf に手紙を送り前述の(・・・この部分一字不明・・・)を伝えた。al-Ashraf はこれが届いたとき喜び、彼に良きことを思いださせた。それから彼は古くからの交友にもかかわらず、彼の王朝で彼を重用せず彼を昇進させなかったことを自ら恥じて、彼をダマスカスの amīr

ṭabikhānāt に任命した。彼は書状を送り相応しい職位が見つかるまで公務なしでいるようにと指示して、彼に重用することを約束した。そして口頭で彼に(・・・この部分一字不明・・・)を目指す彼の目的を伝えた。

父はダマスカスに(8)64年の末に向かった。その後すぐに al-Ashraf Īnāl が亡くなった。

彼の息子 al-Mu'ayyad はスルターンに即位(在位865/1461年)すると、彼をカイロに参上させた。彼は(8)65年 Ramadān 月初め到着して al-Mu'ayyad は名誉の衣を与えた。

このスルターンの時代は彼にとってスルターンとのここで述べられているような約束の有無は別にして政治的には恵まれないときであったろうが、859年から64年にかけての5年間のタラブルス滞在は彼自身にとって思索と著作活動の故郷とでも言える場所の発見であったことが推察される。より詳しく述べているであろうこの書物のこの年代の部分は残念にも失われている。

9.

次に az-Zāhir Khushqadam がスルターンになったが(在位865/1461-872/1467年)、彼は彼を認めそばに侍らせ重用した。スルターンは彼がかねてから保持していたダマスカスのアミール職待遇のままカイロに滞在することを認めた。また金曜日と火曜日の週二回面会することを許した。また彼に以前彼の名前で支給されていて、のち除外されていた手当を戻させるとともに、彼は肉やまぐさ等を支給した。彼は彼を身近に侍らせ、私事を話し、多くの事柄に彼の忠告を求め、彼の仲介することの多くを受け入れた。彼は当時重要な裁定や決定に係わった。多くの人々は彼の仲介で益を得た。人々は彼の館の扉を目指し、行き来したが、彼も徳があり、尊厳を持っていて、頼みに来る者が何を持っているか頓着しないので人々が殺到する状態であった。

彼は多くの重要案件について王国の遠隔地と書簡を交え、決定して、建議した。保護と信頼のなか、このようなことが続いていたが、(8)71年に(この本で)前に説明したカリフ al-Mustanjid billāhi(在位859-884/1455-79年)のことがあった。即ち彼はカリフの要請を受けて、以前のようにカリフをカリフの居住地区に(mahall suknā al-Khulafā')戻すことを進言して、拘束と見なされることをしないように言ったが、スルターンは彼の考えを聞き入れなかった。

事態は(この本で)前述したようなことになり、彼はメッカに遠ざけられた。以降のことについては、あなたは既に(この本で)知っておりここでは繰り返さずまた説明もしない。即ち彼がいかにこの年の Amīr ar-Rakb の 'Abd al-Haqq b. al-Junayd と共にイラクの巡礼団に随行してイラクに向かったか又彼がいかにこれらの諸国を自由に動いたかである。かねてから彼の目的はイラクとタブリーズの王 Jihān Shāh との会見であった。そこで(この本で)前述したように Ḥasan aṭ-Tawīl の手で彼が殺害されるという事件があった。

az-Zāhir Khushqadam が亡くなった(872/1467年)ので、父はこの王国に戻り、アレppoに向かった。この(7)3年の初めにはタラブルスに入った。彼は人から離れて自分の館に滞在して、神に向かい、信仰と善行とコーラン読誦に献身して自分の事柄にかかり切りとなった。突然の死を予期していたようであった。

タラブルスでの期間は何カ月かで終わり、何日間か腹の病にかかった後彼は突然、死に襲われた。彼は死を予期したとき、彼には俗世のはかないもの若干すなわち現金でいくらかに昇る額があり、彼はそれを持ってこさせ息子達に分割して相続させた。(fol. 232b) 当時私('Abd al-Bāsiṭ) はカイロにいたが彼は私の持ち分を分けてくれた。彼はこの総額のうち 3 分の 1 を親友達や第一夫人(四人)以外の妻達等に分け与えた。彼は遺体を清める者を呼びに行かせ、彼に金 1 ディーナールを与えて、次のように言った。「私が死ねば私を清めるために参上せよ」そして彼はどのように清めるかを指示した。彼は次のように言った「身につけているものをとり、衣をはぎ、コーラン読誦をせよ。」と。そして何日か後に彼は激しい胃腸の病気のために Jumādā II 月 13 日水曜日の夜に亡くなった。葬儀の準備がなされ経帷子が着せられた。木曜日の朝に彼の館で彼に礼拝が捧げられ、用意していた墓に埋葬された。

晩年の6年間のカイロにおける宮廷での活躍とスルターンとのアッバース朝カリフの処遇をめぐる対立とタラブルスへの帰還と死を扱っている。このカリフはエジプトのアッバース朝13代目のカリフで、865/1461年に aḡ-Zāhir Khushqadam がスルターンになったときシリアのナーイブであった Jānim al-Ashrafi が激しく反対したので、彼は反対勢力に利用されるのを恐れてカイロの城塞にカリフや大カーディーや高官達を住ませた。Jānim al-Ashrafi は867/1462年に死亡して当座の脅威はなくなったが、カリフだけは死ぬまで強制的に城塞に住まわされることとなった。同時代人にとってはカリフを城塞に移すことは aḡ-Zāhir Khushqadam の歴史的な選択と見なされた。この時以後カリフはマムルーク朝滅亡まで城塞に住まわされることとなった[EF, VII, 727, art., "al-MUSTANDJID (II)" by U. Haarmann]。

'Abd al-Bāsiṭ の歴史叙述の特徴としてアッバース朝カリフの尊重があげられるがそれは父を巻き込んだこの事件の影響もあると思われる。922年以前の叙述は概ね簡単な Ibn Iyās も 871年 Ramaḍān 月の部分で「スルターンは al-Ghars Khalīl——彼は ash-Shaykh 'Abd al-Bāsiṭ の父であるが——への寵がなくなり、メッカへ出発するように命じた。それに彼からダマスカスに持っていたアミールの地位を剥奪した。彼は彼に殴りかからんばかりであった。彼のところには取り巻きの高官達がいたがあたかも彼を知らないように彼から目をそむけた。これは諸王の習いである」[Badā'i, II, 448] と伝えている。死んだ日付について他の史料は全て Jumādā I 月である [aḡ-Ḍaw', III, 196; Badā'i, III, 25; Nayl, Hunt. 610, fol. 206b-207a]。

10.

彼は多くの官職を歴任して感謝すべき生涯を送った。彼は管轄したイスラム教徒の物事に公正と公平さを持って臨み、同情心が厚かった。アレキサンドリアのナーイブ職を辞任したときには住民は彼の館の門を閉め、助けを求め、出発を思い留まるようにと望み、ついに彼は十分に納得させて出立せざるをえないぐらいであった。同様なことはカラクの町でも起きた。カラクの住民は彼の前に立ち次のように言った。「もし私たちにあなたをこの要塞に止めることをお望みなら私たちはあなたにつき従います。私たちはスルターンを恐れておりません」と。マラティーヤでも辞任に際しても同様なことがあった。

彼は人々を好み、謙遜する人にはより謙遜の態度で接した。彼は流血は好まず、どんな状況でも彼の在任中流血の事態には進まなかった。流血に同意しなかったことは彼の稀なことのひとつとして数えられている程である。例外は Ḥasan Qajā の絞首刑であるが、それは az-Zāhir に反旗を翻し兄弟の Taghri Birmish と共に反乱を起こしたためであったし、それも az-Zāhir の命令と裁断に従ったのであった。

(以下の部分では彼の性質の良き点を列挙している。この訳では省略するが、そのなかで職務執行に関しては「彼は王権と諸王と諸国の方式 *ṭarā'iq* に精通しており」「いにしえの諸王や諸アミールのやり方に従った統治の法則を堅持した」ことがあげられている。)

彼は、殊にカイロで噂となるような宴会を開くのが常であった。多くの人々は彼の宴会を基準として全てのアミールたちのそれを評価した。同様にマムルークたちのある者は彼らの主人たち(のそれ)を評価した。宴会にはライース達や名士達その他の者が多く出席したが、特にマウキブのときで彼がカイロにいた日々にはそうであった。

彼は大変寛大であった。・・(中略)・・友人を大切にしてい行き来が頻繁であった。・・(中略)・・知識人と学生、徳や才能のある者を好み優遇した。又貧者や信仰に正しい人や神に近づく者を好み、信頼ある者は彼についてアウラード・アン・ナースのスルターンと言うほどであった。al-Ashraf Barsbāy 王朝時代カラクのナーイブ職に就任する前に何度もダマスカスのナーイブ職の候補者にされた。私が思うに彼はカラクのナーイブであったときスルターンに書簡を送るときにダマスカスのナーイブのように赤い紙に書いた¹¹⁾最後の人間であった。

また彼は、勇気があり騎士道の各種やその他の技芸を知っており、それらの技芸の達人に試合を申し込み彼らに恥をかかせるほどであった。これに関しての話が幾つもあるが、それを述べる紙幅はない。

彼は禁止されていることや安逸やワインを慎んでいた。/(fol. 233a)彼はかつてワインを腹に入れないと誓いそれは堅く守っていた。

彼は諸王のもとで大変尊敬され az-Zāhir は彼に呼びかけるのに(臣下が主君に呼びかけるように) *yā saiyidī* (・・殿)と言い、席から立ち上がった。また彼は何度も彼の前に立ち、彼を座らせるほどであった。az-Zāhir Khushqadam について言えばなんとすばらしく彼を重用したことか。スルターンは彼が伺候すると自ら彼の方に向かい、ある折りには彼の前に立ち彼を座らせた。彼が彼のマジュリスに出席すると彼は彼に近付き又彼に示すような尊重の念を持って彼以外の者に話すことはなかった。・・(以下省略)・・。

(以下略した部分は、断食をはじめ礼拝やコーラン読誦やズィクルなど彼が信仰の念に篤いことを示す部分である。)

又書物を読み研究して著作をした。著作は30冊を越える¹²⁾。その中には以下の書物がある。(以下省略した書目については表2参照)

(以下写本 fol. 233a の残りから fol. 234b の初めまでは彼と著名人のとの間にやり取りされた詩が、作られた背景と共に説明されている。先ずこれは他の史料にも引用されている Ibn Ḥajar との詩のやり取りが述べられる。次に Kātib as-Sirr の al-Qāḍī Kamāl ad-Dīn b. al-Bārīzī とのやり取り、次いで大カーディーの Mujīb ad-Dīn Abū al-Walīd b. Shihna al-Ḥanafī が871年にハリールがアレppoからマラティーヤに向かう時に詩作したものがあげられている。次いで彼への頌詩を作った Ibn Sharaf al-

Mārdīnī 等当時の有名詩人の名があげられている。)

彼 (Khalīl) の伝記を書いた者には Shams ad-Dīn Muḥammad b. 'Abd al-Muḥsin as-Sakandarī がいて彼は *ad-Durar as-Saniya fi-l-Muḥāsin al-Gharsiya* という大部の書物を著した。また、ある有徳の人物は同じく伝記 *ar-Riyāḍ al-Qudsīya fi-l-Muḥāsin al-Gharsiya* を書いた。また ash-Shaykh Ibrāhīm b. 'Abd ar-Razzāq は、彼に捧げられた / (fol. 234b) カスィードを集めた。

彼には40人以上の子供が生まれ、20人以上の女性と結婚して、30人を越える女奴隷を第一夫人以外の夫人とした。約200人のマムルークを所有したが、以前に彼らの一部を解放して、第一夫人以外の夫人や彼の子供の母達の何人かと、彼女たちを解放後に娶せたので、彼のマムルークの子供達の多くは母方を通じて彼の子供達の兄弟となった。

エジプトのスルターン以外にも、イスラームの諸王達の何人かは彼と書簡のやり取りをした。例えば Ibn Uthmān Murād Bak や Ibn Qurmān al-Amīr Ibrāhīm や al-Ḥiṣn の領主 で(この本に)伝記を述べた al-Kāmil Khalīl である。

彼が遺した建造物にはタラブルスに建設したモスク、墓、館、アレキサンドリアの Dār Sa'āda に建設した al-Maq'ad al-Mu'azzam、ヘブロン of 預言者アル・ハリール・マドラサ付属の廟がある。

以上は我々が彼の伝記から要約したもので、もし彼の良き点や状態や物事の推移を述べようとすれば何巻も必要である。彼が最後になしたことは俗世界を捨て、俗世や俗人から遠く離れて注意を向けることなく、タラブルスの彼の館に籠り我々が既に述べたように大きな善行に身を捧げた。(8)71年からこの年までいかなる職務にも就かず¹³⁾、自分のことに掛かり切りになった。彼は多くの善行と慈善を施した。沢山の場所を購入してワクフとした。彼は健康のときや病気のときにも応分の喜捨をした。最後に眼を病み前述のように亡くなった。彼の経帷子は長年彼のもとに用意されていた。至高至大なる神よ慈悲をもって彼をお守りください。我々と彼の間に天国を集めてください。

彼は相続人の中に6人の男、私はその一人である、と一人の娘と三人の妻、——その一人が ash-Shaykh Shams ad-Dīn al-Ḥanafī の娘 as-Sitta Fāṭima である、彼女については、神が望み賜うならば、後で述べることにしたい——以上の者を残した。

IV

この伝記には、カラクのナーイブ就任の時のスルターンとの会話、イーナールとの約束、戦いでの手柄話にみられる逸話に富んだハリール自身の回想録的な側面があり、また誕生にまつわる母の願掛けにみられる人々のレベルでの信仰のありよう等がよく描写されている。息子による父の顕彰のためか辛い評価は述べられていない。そのためか姻戚の奴隷商人の仲介でスルターンのマムルークになったという重要な転機とアウラード・アン・ナースの世代の一つの家族の社会環境をうかがわせる事実は述べられていない。官職と身分については社会的地位を全体として誇張する傾向があると考えられるので他の史料により彼の官職と地位を跡づけることと他の事例との比較が必要であるが、そのための重要な土台となる記述であろう。

ブルジー・マムルーク朝時代の始まりまでにはマムルークとしてイスラーム世界に入り、狩りの技能を生かして主人に仕え、カイロで妻の父の廟に葬られた祖父 Shāhīn, アウラード・アン・ナースであるがマムルークとなり次いで官職を歴任すると共に行政官の能力を生かして著作を行い、気に入った任地に墓を作りそこに葬られた父 Khalīl, 本稿では触れることができなかったが官職には就任せず若いときに5年間(866/1461-871/1467年)商売をしながらマグリブ、アンダルスに学問の旅をしてのちカイロに居住して信仰生活に入りまた著作活動を行いオスマーン朝のエジプト征服3年前に没した著者 'Abd al-Bāsiṭ の3代にわたる生涯はブルジー・マムルーク朝時代の歩みと重なりしかも後者2人は同時代を記録したのである。

この記録の特徴にはその他次のようなものがある。まず、他の史料、その中には 'Abd al-Bāsiṭ の別の書物(例えば Nayl) も含まれるが、それらにおいて年紀が明らかなものでここでは異説を並記したり不確かなところがあることについて、例えば生年と没年についてであるが、これはどう解釈できるだろうか。現在 ar-Rawḍ は洋装本で2巻に製本されているが、第一巻には錯簡がありまた第二巻には本文と同じ筆跡でメモのような小さな紙が一枚挿まれて製本されている。したがってこの写本の形態からこの書物の第二稿が書かれたのではないかと想像される。また 'Abd al-Bāsiṭ は、彼の別の著作である人名録 Majma' ya adh-Dhahabī al-Duwal al-Islām の続編として書かれた簡単な叙述の年代記 Nayl において、度々詳しくは ar-Rawḍ に述べたと記している。このことからこの書物の第二稿の存在が予想される。しかし、現在までのところ発見されていない。

本稿は ar-Rawḍ という著作の全体像を探る試みの一つであり、様々な他の史料との突き合わせによって、当時のより具体的な歴史像が浮かび上がることが期待される。例えば842年に起きた Īnāl al-Jakamī wa Taghrī Birmish の反乱について Ibn Taghrī Birdī の an-Nujūm の記述と比較すればその生き生きとした描写に気がつくことであろう。またこの戦いには Ibn Taghrī Birdī の縁の者も参加している。これは一つの例であるが全体にわたりこの両者の記述を比較することがこれからの課題の一つである。

ハリールについてはここで名前の上げられている彼をめぐるウラマーの情報や、失われたあるいは現在まで発見されていない彼の書物や彼について書かれた書物について簡単ではあるが内容を説明した部分は貴重である。それらの検討は ar-Rawḍ を始めとした 'Abd al-Bāsiṭ の他の著作の特徴を探る試みと並行して行うことにしたい。

注

- 1) マムルーク朝時代の歴史書の研究の現状については、Li Guo(1997)がまとめている。エジプトを中心としてこの10年間における歴史史料校訂の進展と問題点については「マムルーク朝時代15世紀半ばの歴史記述について——'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī の場合」(日本中東学会第13回年次大会, 1997年5月11日)において発表した。

- 2) *EP*, III, 935, art., “IBN SHĀHĪN”, by J. Gaulmier and T. Fahd, や Zubda-Gaulmer, LII-LVII の研究。
Martel-Thoumian, B. (1991), 16-21. は息子の歴史書 *Nayl* の紹介と *Kitāb Zubdat Kashf al-Mamālik* の執筆年代について諸説を紹介しているが本稿で紹介している *ar-Rawḍ* の記事は触れられていない。
- 3) ‘Izz ad-Dīn (1990) はこの著者についての研究であり, それぞれの著作の内容を紹介しているが *Nayl*, *Inbā’-‘Abd al-Bāsiṭ* は利用していない。またハリールについての検討はない。*ar-Rawḍ*, *Majma’*, *Nayl*, *Inbā’-‘Abd al-Bāsiṭ*, 相互の関係と内容紹介は前記発表で行った。また同時代人にラカブも同じ *al-Qāḍī Zayn ad-Dīn ‘Abd al-Bāsiṭ b. Khalil* という人物がいるが, 彼について *as-Sakhāwī* が別人であることを明記しているが [aḍ-Ḍaw’, IV, 24-7], *Ibn Iyās* の新版の校訂本 (*Badā’i*) の索引は旧版の索引を踏襲して混同しているので注意を要する。Brockelmann, C., *GAL*, SH p. 52 に彼の典拠として引用する *ash-Shawkānī*, I. 315-7 は後者である。
- 4) *ar-Rawḍ*, vol. II, fol. 259a-259b すなわちこの書物の末尾は *Ibn Taghrī Birdī* の伝記である。fol. 258b と fol. 259a との間には一葉の欠落があると思われ伝記の最初の部分は失われている。
- 5) 彼は歴史家 *al-‘Aynī* が彼のために書物を捧げている有力な人物の一人でもある。[*al-Manhal*, VI, 312-4]
- 6) ‘*Abd al-Bāsiṭ* は, 序文で本書を書く目的を述べているがその一つが *Inbā’ al-Ghumr* の続編を書くことであった [*ar-Rawḍ*, vol. I, fol. 1b]。その作業過程を如実に物語るのが ‘*Abd al-Bāsiṭ* の署名を持つ補訂部分や付加した記述が余白にびっしりと書き込まれ, ある部分には余白だけでは不足紙片を挟み込んだ *Inbā’ al-Ghumr* の一つの写本 (*Inbā’-‘Abd al-Bāsiṭ*) である。
- 7) 史料により *Jānbak at-Tūr*, *Jandār an-Nūr* と異同がある。
- 8) Martel-Thoumian, B. (1991) は p. 447 のワズィール一覧表で aḍ-Ḍaw’, III, 195 を出典としているが, *Ibn Taghrī Birdī* の記す在職年代をあげている。
- 9) 原文は ‘*ala-s-Sulṭānayni* と双数形であるが意味が不明なのでこのように訳した。
- 10) *al-Manhal*, V, 260 の注 1, しかし *al-Malik az-Zāhir Barqūq* とあるのは *al-Malik az-Zāhir Jaqmaq* の間違いである。
- 11) 赤い紙については, イスラム暦 7 世紀の初めアイユーブ朝時代に *al-‘Ādil* が領土を 3 分割して 3 人の息子達にそれぞれ統治させたときに 3 人はお互いに赤い紙を使い書状をやり取りした。エジプトが政治の中心となりスルターンが統治してダマスカスとカラクについてはナーイブが統治するようになってからも二人のナーイブは赤い紙を使い続けた。[*Zubda*, 131-2; *Zubda-Gaulmer*, 218-9] カラクのナーイブの特別な地位を印象づける行為であった。*EP*, I, 197-8, art., “*al-‘ĀDIL*” by H.A.R. Gibb; IV, 520-1, art., “*al-KĀMIL*” by H.L. Gottschalk; VII, 989-90, “*al-NĀṢIR*” by K.V. Zettersteen]
- 12) *as-Sakhāwī* は前述したように同じく約 30 冊と述べるが *Ibn Taghrī Birdī* と同じ 6 冊しかあげていない。[aḍ-Ḍaw’, III, 197]
- 13) この部分原文は *min ghayri ‘an . . .* と続き, 「職務に就いたことを除いては」とあるが意味が通じないのでこのように訳した。

参考文献

- Badā'i' : Ibn Iyās; *Badā'i' az-Zuhūr wa Waqā'i' ad-Duhūr*, ed. by M. Muṣṭafā, 6vols, Wiesbaden, 1960-75.: Indices, 6vols., Stuttgart, 1984-92.
- ad-Dalīl : Ibn Taghrī Birdī; *ad-Dalīl ash-Shāfi' 'ala-l-Manhal aṣ-Ṣāfi*, 2vols., Makka, 1399/1979.
- aḍ-Ḍaw' : as-Sakhāwī, Shams ad-Dīn; *aḍ-Ḍaw' al-Lāmi' fī Ahl al-Qarn at-Tāsi'*, 12vols., al-Qāhira, 1353-5/1934-6 (rep., Bayrūt, n.d.).
- Inbā'-'Abd al-Bāsiṭ : Ibn Hajar al-'Asqalānī; *Inbā' al-Ghumr bi-Anbā' al-'Umr*, Topkapı Saray Müzesi kütüphanesi, III Ahmet, 2941/2.
- Majma' : 'Abd al-Bāsiṭ; *Majma' al-Mufannan bi-l-Mu'jam al-Mu'anwan*, Maktabat Baladīyat al-Iskandarīya, 4448/800b, musalsal 5 tārikh.
- al-Manhal : Ibn Taghrī Birdī; *al-Manhal aṣ-Ṣāfi wa-l-Mustawfi ba'da-l-Wāfi*, vol. 1-7, al-Qāhira, 1985-94.
- al-Manhal-Wiet : Wiet, G.; *Les Biographie du Manhal Safi*, Le Caire, 1932.
- Nayl : 'Abd al-Bāsiṭ; *Nayl al-Amal fī Dhayl ad-Duwal*, Bodleian Library, MS. Hunt. 285, Hunt. 610 (Uri Arab. Moh. 802, 812, Nicoll. p. 596)
- an-Nujūm : Ibn Taghrī Birdī; *an-Nujūm az-Zāhira fī Mulūk Miṣr wa-l-Qāhira*, 12vols., al-Qāhira, 1929-56.
- ar-Rawḍ : 'Abd al-Bāsiṭ; *ar-Rawḍ al-Bāsim fī Ḥawādith al-'Umr wa-l-Tarājim*, Vatican Library, Vaticano Arabo, 728, 729 (便宜的にそれぞれ vol. I, vol. II として引用)
- Wajiz : as-Sakhāwī, Shams ad-Dīn; *Wajiz al-Kalām fī-dh-Dhayl 'alā Duwal al-Islām*, 4vols., ed. by Bashshār 'Awwād Ma'rūf et al., Bayrūt, 1995.
- Zubda : Khalīl b. Shāhīn; *Kitāb Zubdat Kashf al-Mamālik wa Bayān at-Ṭuruq wa-l-Masālik*, Paris, 1894. (rep., n.d.)
- Zubda-Gaulmer : Gaulmer, J.; *La Zubda Kachf al-Mamālik de Khalīl aṣ-Ṣāhīrī*, Beyrouth, 1950.
- Hadiyat : Ismā'il al-Baghdadī; *Hadiyat al-'Ārifīn, Asmā' al-Mu'allifīn* (Hājji Khalīfa, *Kashf az-Zunūn*, 7 vols, Bayrūt, 1413/1992の vols. 5-6.)
- 'Izz ad-Dīn, Muḥammad Kamāl ad-Dīn (1990) *'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī mu'arriḥan*, Bayrūt.
- Li Guo (1997) Mamluk Historiographic Studies : The State of Art. *Mamlūk Studies Review*, 1, pp. 15-43.
- Martel-Thoumian, B. (1991) *Les Civils et l'Administration dans l'État Militaire Mamlūk (IX^e/XV^e siècle)*, Damas.

表1 Khalil b. Shāhīn の年譜

Ibn Taghrī Birdī [al-Manhal, V, 258-261; an-Nujūm]	as-Sakhāwī + Ibn Iyās [aḍ-Ḍaw', III, 195-8] (Badā'i')
813年イェルサレム生まれ。 父 Shāhīn は al-Amīr Shaykh aṣ-Ṣafawī (d. 801/1398) のマムルーク出身でイェルサレムのナーイブ兼 Nāzir。 父 Shāhīn がカイロでアミール Uzbek ad-Dawādār (d. 833/1429) に仕える。 父 Shāhīn の死後同じく Uzbek ad-Dawādār に仕えた。Uzbek が捕らえられた (831年) 後スルターンのマムルークとなる。 Hājib Iskandariya 837年 Rabī' II 月10日 Nāzir 職兼任 837年 Shawwāl 月23日 ナーイブ就任。Nāzir 職と Hājib 職も兼任。 839年 Jumādā II 月23日木曜日 ナーイブ辞任。カイロに参上し Amīr Ṭabkhānāt のイクターを得る。 839年 Rajab 月 7 日木曜日 鑄造所の Nāzir (Nāzir Dār aḍ-Ḍarb)。 839年 Ramaḍān 月 7 日 月曜日から Shawwāl 月 8 日ワズィール職。 840年 al-Hājj bi-l-Maḥmil のアミール。カイロに戻る。 841年 Rabī' I 月 5 日土曜日 al-Karak のナーイブ。 841年 Dhu-l-Ḥijja 月13日 al-Karak のナーイブ(諸ナーイブ一覧表の中に)。 841年末 Malaṭiya のナーイブ。(4年以上滞在) (2度カイロに出向き辞任を求め2度目に承認される。)	813年 Sha'bān 月イェルサレム生まれ。 <793年生まれ [Badā'i', III, 25]> 15歳のとき (828年) 父と共にカイロ。 父の死後 Uzbek ad-Dawādār に短期間マムルークとして仕える。 Uzbek が捕らえられた (831年) 後スルターンのマムルークとなる。 Nāzir Iskandariya, Hājib, adh-Dhakhira に係わる香料の売却担当 Nāzir に任命。 837年 <Rabī' II 月 [Badā'i', II, 153]> アレキサンドリアのナーイブ。 al-Khwand Julbān Umm al-'Azīz の姉妹と結婚。 Amīr Ṭabkhānāt としてカイロに戻る。 鑄造所の Nāzir (Nāzir Dār aḍ-Ḍarb) <839年 Ramaḍān 月 [Badā'i', II, 169]> ワズィール職(短期間), muqaddam。 <840年 Ṣafar 月 [Badā'i', II, 172] ワズィール職辞任>。 840年 <Rajab 月 [Badā'i', II, 174]> Amīr al-Hājj 任命。Shawwāl 月巡礼に出発 <841年 al-Muḥarram 月 [Badā'i', II, 177]> 巡礼団カイロに戻る。 <841年 Ṣafar 月 [Badā'i', II, 177]> al-Karak のナーイブ。

842年 Jumādā I 月15日火曜日 Şafad の Atābak。 (an-Nujūm のみ)。	<842年 Rajab 月 [Badā'i', II, 205] > al-Karak の ナーイブ職免職。 <842年 Rajab 月 Şafad の Atābak [Badā'i', II, 205] > Şafad の Atābak 待遇 <842年 Dhu-l-Qa'da 月 [Badā'i', II, 215] > Malaṭīya のナーイブ(4年以上滞在)。 (2度カイロに出向き辞任を求め2度目に承認 される。)
847年 Jumādā II 月20日月曜日(日付 an-Nujūm の み)アレppoの Atābak 職。	アレppoの Atābak 職。 アレppoの城塞の獄につながる。
848年 Rabī' II 月 3 日月曜日(日付は an-Nujūm の み)アレppoの Atābak 職免職。 イエルサレムに無役で滞在。巡礼。	Ibn Ḥajar の仲介により釈放される。 ヘブロン滞在。 <850年 al-Muḥarrām 月 [Badā'i', II, 254] > イエ ルサレムのナーイブ。
850年 Muḥarrām 月 3 日木曜日イエルサレムの ナーイブ。(an-Nujūm のみ) カイロに出向きダマスカスの Taqdimā Alf の地位 を得てダマスカスに滞在。	ダマスカスの Taqdimā. ナーイブ。次いで Amīr 'Ashara がつけ加えられた。 Amīr al-Ḥājj ad-Dimashqī を2度つとめる。
851年 Muḥarrām 月 1 日土曜日ダマスカスの Ta- qdimā Alf の地位を得る。(an-Nujūm のみ)。	(一度目は aḡ-Ẓāhir Jaqmaq 時代(842-857)の終 わり,二度目は al-Ashraf Īnāl 王朝(857-865)のは じめ)
854年カイロに2度目の到着。(Ibn Taghrī Birdī と会見)	タラーブルス滞在。20人長の地位。
857年 al-Malik aḡ-Ẓāhir Jaqmaq 時代のシリアの ナーイブ表の中に al-Karak のナーイブ。(an- Nujūm のみ)。	ダマスカスに20人長の地位を得て戻る。al- Mu'ayyad (865/1461) はカイロにおける taqdimā を与えようとした。
	<865年 Sha'bān 月 [Badā'i', II, 375], ダマスカ スからカイロに。カイロ滞在。>
	aḡ-Ẓāhir Khushqadam 時代初期, 20人長の地位。 公務から免除されてカイロ滞在。
	<871年 Ramaḍān 月 [Badā'i', II, 448] > アミー ルの地位を剥奪。イラークの巡礼団と共にイラー クに向かい, al-Hilla や Baghdād などを訪問。
	aḡ-Ẓāhir Khushqadam の死後, アレppo。タ ラーブルス。
	873年 Jumādā I 月没。< [Badā'i', III, 25] >

表2 Khalīl b. Shāhīn の著作一覧

出典 [ar-Rawḍ, vol. II, fol. 233a; al-Manhal, V, 258-261; Hadīyat, V, 353-54]

17冊と al-Manhal のみに見られる 1 冊の全18冊, al-Manhal と Hadīyat にあげられている書目はカッコに括った。表の中の簡単な説明は ar-Rawḍ と al-Manhal にあるもの。

1. *Burhān al-Mustaqīm fī Tafsīr al-Qurʿān al-ʿAẓīm*
 2. *al-Tuḥfat al-Manīfat fī-l-Aḥādīth ash-Sharīfa*
 3. *al-Mawāhib fī Akhlāq al-Madhāhib* (1. *al-Mawāhib fī Akhlāq al-Madhāhib*, *fī Akhkām ash-Sharʿ ash-Sharīf* [al-Manhal], *al-Mawāhib fī Akhlāq al-Madhāhib* [Hadīyat])
 4. *al-Taḥrīr fī Anwāʿ at-Taʿāẓir*
 5. *Ijmāʿ al-Jumhūr ʿalā Madhammat Sharrāb al-Khumūr*
 6. *al-Ishārāt fī ʿIlm al-ʿIbārā*, 大部な全 2 巻 (4. *Kitāb al-Ishārāt fī ʿIlm al-ʿIbārā* [al-Manhal], *Kitāb al-Ishārāt fī ʿIlm al-ʿIbārāt fī-l-Taʿbīr* [Hadīyat])
 7. *al-Kawkab al-Munīr fī Uṣūl at-Taʿbīr* (3. *Kitāb al-Kawkab al-Munīr fī Uṣūl at-Taʿbīr* [al-Manhal], *al-Kawkab al-Munīr fī Uṣūl at-Taʿbīr* [Hadīyat])
 8. *Kashf al-Mamālik wa Bayān at-Ṭuruq wa-l-Masālik*, 全 2 巻 (*Kashf al-Mamālik wa Bayān at-Ṭuruq wa-l-Masālik* [Hadīyat])
 9. *Zubdat Kashf al-Mamālik*, 上記の書物を約二分の一に要約したもの (*Zubdat Kashf al-Mamālik fī Bayān at-Ṭuruq wa-l-Masālik fī Faḍāʾil Miṣr* [Hadīyat])
 10. *Zubdat az-Zubda*, 上記の書物を要約したもの (? *aṣ-Ṣafwat fī Talkhīṣ az-Zubda* [Hadīyat])
 11. *Kitāb al-Inshāʾ ash-Sharīf wa mā bihi min kull Talīd wa Ṭarīf* (? 2. *Kitāb al-Munīf fī-l-Inshāʾ ash-Sharīf* [al-Manhal], *al-Munīf fī-l-Inshāʾ ash-Sharīf* [Hadīyat])
 12. *al-Ghāya fī-l-Ṭibb*
 13. *al-Muʿtamal fī-l-Ghalaṭ al-Mustaʿmal*
 14. *adh-Dhakhīra li Waqt al-Ḥīra*
 15. *Dīwān Khūṭab*
 16. *Dīwān Shiʿr*, 全 3 巻 (6. *Dīwān Shiʿr*, 何巻かにわたるもの [al-Manhal])
 17. 書簡
-
18. (5. *Kitāb ad-Durrat al-Muḍīyat fī-s-Sīrat al-Murḍīyat* [al-Manhal], *ad-Durrat al-Muḍīyat fī-s-Sīrat al-Murḍīyat* [Hadīyat])

図 1. 'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *ar-Rawḍ al-Bāsim fī Ḥawādith al-'Umr wa-t-Tarājim*, Vat. Arabo 729, fol. 229b.

